

しゃけうじやまいせき

社家宇治山遺跡

(海老名市No.76遺跡)

調査期間 20030303～20080509

所在地 海老名市社家地内

時代

弥生
古墳
奈良・平安
中世
近世



作成日:20090611

概要

本調査は、中日本高速道路株式会社による、東名高速道路改築に伴う事前調査として2003年3月から開始し、2008年5月まで行われました。

本遺跡は、海老名市の南西部JR相模線社家駅の北西約0.3 kmに位置し、相模川左岸の自然堤防上に立地しており、遺跡の東側には後背湿地が広がっています。

中近世の遺構としては、竪穴状遺構、掘立柱建物址、井戸址、土坑、溝状遺構、ピット、畝状遺構などが発見されました。これらの遺構は、社家地区に展開していた戦国時代と江戸時代の屋敷地に付随する遺構と考えられます。遺物は中国から輸入された磁器(じき)、国産の陶磁器(とうじき)類、かわらけ等の土器、漆(うるし)椀(わん)や下駄(げた)等の木製品、キセルや釘等の鉄製品が大量に出土し、当時の人々が生活で使用していた器(うつわ)や道具類などの様子がわかりました。

奈良・平安時代では、遺跡の北側を中心に住居跡、掘立柱建物址、井戸址等が多く発見されており、7世紀～8世紀に属する集落が展開していたと考えられています。また、遺跡の東側では道状遺構が検出されており、8世紀～10世紀にかけて何度か補修を繰り返して使用されていたことがわかりました。この道状遺構は、相模川の自然堤防上に広が



▲出土した磁器



▲出土した陶器

っていた集落の東側に造られたものと考えられます。遺跡の北側で検出された溝状遺構の一つからは、覆土中から多くの遺物が出土しており、その中には皇朝十二銭(こうちょうじゅうにせん)の1つである神功開宝(じんこうかいほう)(初鑄年代 765 年)が発見されました。

古墳時代～弥生時代の遺構は、住居跡、方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)、溝状遺構、古墳、土坑、ピットなどが発見されています。集落は、遺跡北側の自然堤防を中心に発見されており、遺跡の北側を中心に、管玉(くだたま)を製作した玉造(たまつくり)工房の跡と思われる住居跡が複数発見されています。工房の跡からは、グリーンタフ製の管玉の製作途中の物や製作過程で廃棄された玉の破片、原料となる原石等が多数出土しました。玉造り工房の発見された遺跡は県内で数例しか報告されておらず、大変貴重な成果といえます。

方形周溝墓は、遺跡の南側から北側にかけての広い範囲に広がっていました。神奈川県内の低地において、古墳時代前期の方形周溝墓群が発見された数少ない貴重な事例と考えられています。

現在は、昨年度に引き続き調査成果をまとめるために出土品整理作業を行っています。



▲出土した甕型土器



▲玉造工房跡と思われる住居と出土遺物



▲出土品整理作業風景